

ジェンダー・システムとカニバリズムの世界 —主人公 Marian のレジスタンスとサバイバル—

薬 師 英 子*

Gender System and Cannibalism in Margaret Atwood's *The Edible Women* — The Resistance and Survival of Heroine —

Eiko YAKUSHI*

Abstract

The following study examines the description of gender system and cannibalism in Margaret Atwood's *The Edible Women*. The book is author's first published novel in 1969. The heroine, Marian MacAlpin, is a university graduate who has been working for a market research company for four months. She is, as her friend Clara tells her, as "abnormally normal" as a person can be till she gets engaged to Peter, who is in his articling year as a lawyer. After the engagement, she becomes dependent on Peter and she unconsciously lets him make decisions for her. While she loses her identity, she gradually starts refusing food. As the wedding date approaches, Peter decides to hold a party. She gets her hair done at beauty salon and wears red sequined dress which are both not in her character. As she walks home, feeling like carefully iced and ornamented cake, she realizes that she is being consumed by the culture of consumerism and the idea of femininity which all have been manufactured by men. On the next day, Marian bakes a cake shaped and decorated like her from the night before and offers Peter to eat it as a substitute. Peter leaves hastily, without eating, but by eating the cake herself, she regains her identity and breaks free from Peter's control and pretense femininity. The story takes place in 60' in modern Canada and the heroine's narrative depicts the world from the minor side of the view as female. While the heroine struggles to seek her identity, she cannot escape from her victim complex. She feels she is living in a world of consumerism and ideal femininity which are constructed by male society. In this paper, I would like to examine the heroine's victim complex and analyze the gender politics depicted in the novel. Also, I would like to look into the depiction of cannibalism which is one of the themes of the novel.

*駒沢女子大学 非常勤講師

序論

Margaret Atwood (1939-) の *The Edible Woman* (『食べられる女』) は 1969 年に出版された著者の最初の長編小説である。ⁱ 主人公 Marian MacAlpin はトロント大学を卒業し、Seymour Surveys という商品調査を行う会社に勤める 23 歳のごく平凡な女性で、容姿端麗で司法修習生である Peter という恋人がいる。はた目には理想的な恋人も存在し、順風満帆に思われていた生活が、Peter との婚約を機に変容していく。Marian は一個人としてではなく、誰かの妻、そして資本主義社会の消費される存在になっていくことで、自己を失うと同時に、食べ物を拒絶していくようになる。自分が社会や Peter に消費されていることに気付いた Marian は、自分に似せた人型のケーキを焼き、そのケーキを自分の身代わりとして Peter に食べさせようとする。Peter がケーキを食べずに去ること、またそのケーキを Marian 自身が食べることでジェンダーの役割から解放され、自分が消費者となることで自己を取り戻していく。

『食べられる女』は Peter に婚約を申し込まれるまでの 1 章、その後の経過が描かれる 2 章、そして Peter との婚約が解消される 3 章で成り立ち、第 1 章の語りが “I” であるのに対し、第 2 章では “She” と客観的視点に代わり、第 3 章では再び “I” に戻る構成になっている。この 1 人称から 3 人称への変化からも分かるように、この作品は、女性が資本主義社会や父権主義社会に消費されることでアイデンティティを失うが、やがてそれに抵抗し、生

き残ろうとすることで自己を取り戻す物語である。作品全体を通し、女性であるために、社会の中心である男性とは対照的に常にその他の者である疎外者としての生活を余儀なくされる日常が描かれている。主人公 Marian に見られる犠牲者意識は、その後のアトウッドの作品に共通するカナダ文学の重要な要素でもある。ⁱⁱ 著書『サバイバル—現代カナダ文学入門—』で言及されているように、アトウッドの作品に登場する主人公たちは、様々な人種が共存するモザイク文化の中で自分の起源や文化、社会における役割を探究しながらも、確固とした自己像をつかむことができずに葛藤する。『食べられる女』の主人公もその例外ではない。第 1 章で商品調査のアンケートをとるため、週末の郊外を家から家へと渡り歩く Marian の姿は、アイデンティティを模索する彼女の内面が描かれている象徴的な一場面である。本稿では、主人公が対立する社会や人間との関係をどのように認識し、またそれに抵抗し、受け入れていくのかを考察する。また、『食べられる女』の主題の 1 つでもあるカニバリズムが象徴する描写に焦点を置き、そこに浮き彫りになる資本主義社会、父権主義社会に生きる女性の視点や精神を検証していきたい。

1. ジェンダー・ポリティクス

アトウッド作品は環境や政治など深刻な社会問題を風刺的に描きながらも、そこに描かれる様々な権力関係を描いている。ⁱⁱⁱ

『食べられる女』は主人公 Marian が彼女自身

ⁱ テキストは Margaret Atwood, *The Edible Woman*. (1969; London: Virago Press Limited, 2009) を使用し、本文中の引用頁はこの版による。日本語版は『食べられる女』大浦暁生訳、新潮社、1996 年を参照した。

ⁱⁱ 『サバイバル—現代カナダ文学入門—』において、アトウッドは「カナダの中心的なシンボルとは、イギリス系カナダ・フランス系カナダ双方の文学に頻出している事例によれば、疑う余地なく「生き残ること」(サバイバル)なのである。」(p.27) と述べている。アトウッドはカナダ文学の中心は「生存者」であり、つまりは「犠牲者」とそれに似かよった者たちが多種多様に存在していると分析している。犠牲者とは「動物の犠牲者…、先住民の犠牲者、開拓者の犠牲者、移民の犠牲者、芸術家の犠牲者…、女性の犠牲者、ケベック州の犠牲者、家庭における個人という犠牲者、自然における人間という犠牲者、人間による自然という犠牲者などである。」(pp.ii-iii)

ⁱⁱⁱ “... she is a(an)... novelist known for addressing serious issues and social problems with humor and wit. Respected by feminists for her exploration of gender politics, Atwood also explores humanity's relationship to nature and often parodies many of our social and cultural conventions.” *MAX notes for The Edible Woman*, p.2

の持つ概念とは対照的な価値観や社会的観念に違和感や疎外感を抱きながらも、その社会に順応することで消費され、自己を喪失していく姿が描かれている。ここでは、主人公 Marian の婚約者 Peter を中心に男性の視点からみた女性観、同性が抱く女性観、消費社会における女性観のそれぞれに焦点を置き、Marian やその他の女性たちがその概念をどのように受け止め、抵抗し、生き残ろうとしていくかを検証していく。

1. パワー・ポリティクス

「パワー・ポリティクス」とはアトウッド作品全体に共通するテーマの1つであり、関わりをもつものはそれが男女間であれ、国家間であれ、どちらかが犠牲者にならざるを得ない関係であることを暗示している。^{iv}『食べられる女』では Marian と Peter との恋愛関係が婚約を機に、女性である Marian は所有されるもの、Peter は自分の所有物に対して権力を行使するという明確な力関係に転移していく様子が描かれている。作品中では、例えば Marian と Peter のように恋愛関係や婚姻関係になくとも、女性が常に男性にとって定義された「女性らしさ」の概念に縛られて生活している様子が描かれている。

アトウッド作品に共通する概念は、いずれの作品も主人公が女性で語り役でありながら、彼女たちの語る言葉は男性によってつくられた言語であることだ。つまり、女性の視点で語られた物語でありながら、男性の築いた社会規範のもとにある世界観だという矛盾がある。^v60年代から70年代にかけ、アメリカから発信された女性解放運動はそれまでの男性中心の社会の構図に新たに女性の位置づけを呈したが、それは浸透するまでにはいたらな

かった。人々の間には「男は仕事、女は家事・育児」という定義がまだ根深く残っていた。それを象徴するかのように、物語に登場する男性は社会の規範となることに関わる仕事に就いている。Marian の大学時代の友人 Clara の夫 Joe は教員、イギリス帰りの友人 Len はテレビ業界に勤めている。恋人、後に婚約者となる Peter は弁護士の卵である。彼らは社会の基盤を作り統制する法律や、情報を提供するマスコミ業界、人の思想に関わる教育界など社会の概念を作り出し、それを管理する仕事に携わっている。社会の中で常識化している性別役割分業が、実際は文化という衣をまとった偏見の根源であることを暗示している。

1-2；同性が抱く女性観

Marian がアイデンティティ認識に苦悩する大きな要因の一つは、彼女を取り囲むその他の女性たちが皆一様に男性の抱く女性観を容認していることにある。

『食べられる女』で唯一女性の権利に関して革新的な考えを持っているのは Marian の同居人 Ainsley Tewce である。Ainsley は Marian と同様、大学を卒業したばかりの23歳の会社員だが、いずれは画廊に勤め、そこで出会った芸術家と結婚はせずに妊娠し、シングルマザーとして子育てをしようという考えを持っている。しかし、その Ainsley でさえも、日常的には世間一般に問われる「女性らしさ」の概念を認識し、相手の男性や社会のニーズに合わせて生活している。物語の冒頭は Ainsley が昨晚のさえない飲み会の愚痴を Marian に話す場面から始まる。その晩に集まった男性たちは歯科医の卵たちで、歯の話題にし

^{iv} 「ロマンティックな響きを持つ「恋愛」と通常呼ばれる男女の関係が内部崩壊している実態と、何よりもそれが犠牲者を生み出す関係性であること、言い換えれば権力関係を隠べいたものである」『マーガレット・アトウッド 現代作家ガイド5』(p.92)

^v いわゆる「男によってつくられた言語」によって規定されている「女」であるということ。さらに、言葉というものが、どのように動き続ける現実を「解釈」し、定義し、ひとを特定の価値体系のなかに閉じ込めているのか、それによっていかに生身の人間が自発性や自由を奪われているのか、それがときにコミカルな、ときにシニカルなタッチで執拗に描かれている。P.102 『マーガレット・アトウッド 現代作家ガイド5』

か興味をしめさないような退屈な相手であったため Ainsley はお酒を飲んで気を紛らわすしかなかったと不満を漏らす。電動歯ブラシ会社で欠陥品調査係を務める Ainsley は、その手の知識があるにも関わらず、自分自身には知識がないふりをして、男性の気を損ねないよう慎重にふるまう。ここには同性の Marian の前では男性に対して攻撃的な発言をする一方、実際の男性たちの前では社会が理想とする女性らしさを演じる矛盾がある。さらに Ainsley の怒りの矛先は Marian の恋人 Peter にまで及ぶ。Ainsley は機嫌が悪いと Peter の話を持ち出し否定的な発言をする。Marian が Peter に monopolize されているとも指摘し、婚約をした時も否定的で、祝いの言葉をかけるどころか、離婚手続きが簡単だという理由からアメリカで結婚するように助言を呈する。Marian の同僚である Office girls たちに対してもよそよそしく、一線の引いた態度をとる。また Marian の大学時代の同級生である Clara に対しても、本本人の前では指摘しないが、Marian と 2 人になると完全に否定的な言動をする。すでに子どもを 2 人産んでいて、3 人目を妊娠して身重のため夫 Joe に家事や 2 人の子どもの面倒を任せきりの Clara をまるで家畜のようだと比喻して、それは結婚した Clara の責任であると批判する。

アメリカ発の女性解放運動にはずみがついた 60 年代に大学教育を受け、心理学や芸術に関心が高く、女性解放を促すような発言を繰り返す Ainsley が自分以外の女性に対しては排他的であり、また、Marian も Ainsley の画期的で特異な考えを共有することができない。それは Ainsley が男性主権の社会状況を批判しているのではなく、それを受動的に受け止めるだけの女性を批判しているからだ。Ainsley は革新的な言動で女性の特権を主張しているようで、実際には同じ女性を批判することが彼女にとっての男性社会に対する抵抗なのである。さらに、相手の男性たちが

「言葉」を操る口に携わり、そこに歯科医として患者に決定的な権力を持つ立場の職業であることが、作品の冒頭から男性中心の父権社会であることを暗示している。(機嫌が悪いと Peter の話を持ち出し否定的な発言をする。Marian が Peter に monopolize されているとも指摘する。婚約をした時も否定的で、祝いの言葉を言うどころか、離婚手続きが簡単だという理由からアメリカで結婚するように助言を呈する。Marian の同僚である Office girls たちに対してもよそよそしく、一線の引いた態度をとる。Marian の大学時代の同級生である Clara に対しても完全に否定的。すでに子どもを 2 人産んでいて、3 人目を妊娠して身重のため夫 Joe に家事や 2 人の子どもの面倒を任せきりの Clara をまるで家畜のようだと比喻して、否定する。他の女性が男性に消費されている姿を否定することが Ainsley の男性に対する抵抗の形。Ainsley は女性に対しても攻撃的。女性の権利を主張しているようでも、Marian はそれに懐疑的、というより批判的。)

Marian が務める Seymour Surveys の同僚である女性たちや女性の上司たちは社会に要求される「女性らしさ」を忠実に実現する典型的な存在として描かれている。Ainsley が Clara をただ飼いならされている家畜のようだと指摘した言葉の伏線であるかのように、Marian は同僚の Lucy たちを動物に例えて描写している。また、昼食に注文した Kidney Pie を機械的に口に運ぶ姿がロボットのようであるとも指摘する。1960 年代のカナダを背景とした環境の「女性らしさ」とは男性資本の家父長的視点から描かれた女性像であり、女性は常に男性が望む「女性らしさ」を意識して生活している。彼女たちは、男性の理想とする行動をとれば「女性らしい」と評価され、その逆ならば「女性らしく」ないと批判される。それが日常的に繰り返されることで「女性らしさ」は男性の望むものではなく、社会全体の共有の常識的概念になっ

ていくことが問題なのだ。Marian の階下住む女家主も飲酒や男性との関係に関し、結婚前の「女性らしい」暗黙の了解ともいえる規則をもっている。Marian の会社の女性上司たちは結婚後を退職し、家庭に入ることが当然であるような伝統であると考えて。友人 Clara も、自分の意見を持たず、夫 Joe の意見に賛同しているだけだ。彼女たちに無意識のうちに身についた「女性らしさ」は、言動にあらわれるだけでなく、自分がそのように選択したような錯覚におそわれていくようになる。

女性が社会に出ることの難しさは Marian が出社するまでの過程にも描かれている。Marian と Ainsley が住む部屋は、もともとは使用人が使っていたと思われる部屋で、上品な旧市街にある大きな家の最上階にある。玄関にたどり着くまでには、狭く滑りやすい階段を踊り場に置かれた置物や壁に掛けられた家主の先祖の様々な記念品や写真を巧みにかわして降りなければならない。女性が会社に履くものとされているハイヒールではなおさらに、家主の先祖の遺品の数々はまるで家を出て、外で働く Marian の行く手を阻むかのような存在である。さらに戸口では女家主が Marian を待ち構えていたかのように立ちはだかり圧力をかける。その女家主は夫の残した家を貸すことで生計を立てている。夫が亡くなってもなお、夫に擁護され続けることにある種の誇りを抱く女主人の生き方はまさに父権主義の象徴と言える。

2. カニバリズムの象徴する世界

『食べられる女』においてのもう一つの主題はカニバリズム的な描写である。カニバリズムとは本来「人食い」を示す言葉であるが、アトウッドは権力

者として人や物を支配、もしくは消費する側になるか、それとも支配、消費される側になるかという、現代の消費社会の弱肉強食の世界観の比喩的表現として用いている。また女性は消費社会にだけでなく、男性優位のジェンダー構造の中で、男性によってつくられた「女性らしさ」を追求する過程で自らが商品化され、消費される二重の犠牲者になっていく。^{vi}ここでは、カニバリズムの概念を比喩的な描写で描いている場面、そして、「消費される」ことを身体的に拒絶するようになる Marian の変容する過程を検証していきたい。

2-1. カニバリズムの比喩的描写

『食べられる女』は「調理台の表面は（大理石が望ましい、）道具、材料、それに指も、作業が終わるまで冷たくしておくこと…」という料理本の一節で幕を開ける。この一節が、食材として Peter に operate（調理）されていく Marian の運命を語る伏線になっている。^{vii}

物語の中で最初に描かれる最も印象的なカニバリズム的描写は、Peter が趣味の一つとする狩猟の話をする場面である。Marian が初めて感情的になり、衝動的な行動を起こすのも Peter の狩猟の体験話がきっかけとなっている。Marian の大学時代の友人 Len を紹介された Peter は男同士 2 人で趣味の話を始める。仕留めた獲物のウサギを処理するために腹を引き裂いた瞬間周囲に臓器が飛び散るという残虐な行為を楽しげに話す Peter を目の前にして、Marian は激しい衝撃を受ける。普段 Marian に見せる姿からは想像できない暴力的な行為を語る Peter はまるで別人で、その場にいる Marian は不安と恐怖に襲われ無意識

^{vi} 「生き残り」をテーマとしているアトウッド作品の主人公は「女性としてのアイデンティティ」を模索すると同時に、もうひとつの課題を持ち、二重のテーマとしていることが多い。それは「怪物としての自然」と「怪物としての隣人のアメリカ」という二重の恐怖と挫折感の増幅作用、「内なる自己崩壊の恐怖」と「外なる侵略者の恐怖」といった緊張関係である。マーグレット・アトウッドとカナダ的想像力 樋波雅弘 p.19 参照

^{vii} “The surface on which you work (preferably marble), the tools, the ingredients and your fingers should be chilled throughout the operation…”

のうちに泣き始めてしまう。一度は化粧室に避難して気を持ち直し、席に戻るが、Marian は自分が Peter から離れられない関係だということを Len によって気づかされる。バーから出た Marian は Peter に対する恐怖を払拭できず、彼の腕を振り払い、突然走り出す。無力の Marian にとって逃げることは唯一の防御策であり、抵抗であったが、車で先回りしていた Peter に取え無く捕まる。皮肉なことに、Marian が自分が「獲物」であると認識して逃げた結果、Peter の「狩猟者」としての本能が刺激され、結婚というさらに確固とした権力関係に取り込まれることになる。

この出来事以降、Marian は自分が獲物として見られているという意識を強くする。婚約後、レストランで注文を待つ2人は、子どもの教育について意見を交わす。Peter の考えに同調できない Marian は Peter の真意を確かめるため目を見ようとするが、Peter は椅子の背に寄りかかり、レストランの薄暗い照明の影に隠れて表情は見えない。暗がりでは様子が伺えない状態はまるでハンターが獲物から隠れて茂みに身を潜めているかのように感じる。そこに、絨毯のしかれた床を音もなく猫のようにやって来たウェ이터が、注文したレアステーキの皿を置いていく。空腹だった Marian は半分までは口に運ぶが、目の前の牛肉が Peter の捕えたウサギのように処理されたと思うと、突然筋肉の塊にしか見えなくなってしまう。また、目の前で何の無駄もなく巧みにナイフ使い、肉を切る Peter の姿に無感情で暴力的な印象を受け、機械的に牛を処理していく作業と、時折患者を診察するように自分に触れてくる Peter の行為が重なる。この時を機に、Marian は牛肉から始まり、豚肉、羊肉、鶏肉など部位が明確に分かるようなもの食べること

ができなくなる。

お披露目パーティー中、Marian は Peter の後姿を見つめながら、2 人の未来を想像する。そこにはバーベキューを準備する Peter の後姿が見えるが、Marian の姿はない。つまり、Marian は Peter によってバーベキューの食材として調理されてしまったことを暗示している。

結論

マーガレット・アトウッドは *The Edible Woman* という作品を通して、1960 年代当時の社会規範や権力のからくりを浮き彫りし、主人公 Marian の出口なしの女性の精神的危機状況を描いている。

作品の Introduction にはアトウッドの次のような記述がある。“It’s noteworthy that my heroine’s choice remain much the same at the end of the book as they are at the beginning : a career going nowhere, or marriage as an exit from it.” (p.x) このアトウッドの言葉にあるように、Marian は Peter との婚約を解消することで、自己を取り戻し、家父長的な環境に取り込まれることから逃れたにせよ、彼女の生きていく社会自体は依然として変わらないのである。婚約発表を機にそれまで勤務していた調査会社は退職することとなり、同居人の Ainsley が出て行った今、2 人分の家賃を払わなくてはならない Marian は、おそらくこれから住む場所も探さなければならない。自己の喪失という大きな危機を一端は免れたものの、Marian の生活は大学卒業後の振り出しに戻っただけなのである。つまり、Marian は何かに打ち勝った「勝者」でもなく、問題を解決したわけでもない。一時的に危険を回避して、生き残っただけなのである。^{iv} また、もう一つ留意しておくべきは、Marian

^{iv} 『サバイバル—現代カナダ文学入門—』でアトウッドは「重要なのは、死ぬことをまねがれることであり、これこそ賢さ・老練さ・きわどい脱出などによって可能になることだ。…さらに動物物語においては、ハッピー・エンドになることで、最終的に問題解決されるわけではない。たとえ危機から逃げ出せたとしても、その次には、逃げられないような別の危機が待ちかまえている…」(p.24) と述べている。Marian が Peter に追われる動物であるような比喩から、この作品にも同様の意図があると考えられる。

に女性としての固有の自己認識が目覚めた一方、まるでこれまで通りの社会のバランスを保つかのように、未婚の母として子育てをするという先鋭的な考えを持っていた同居人の Ainsley が結婚し、父権社会に収まっている点である。その Ainsley の結婚相手でもあり、Duncan の父親的存在でもあった Fish がアパートからいなくなってしまったことで、Duncan は生活のバランスを崩してしまう。ここには誰かが消費者もしくは加害者となることで、もう一方には必ず消費される者や被害者が生まれることの必然性とアイロニーが描かれている。

『食べられる女』に描かれる閉塞された社会状況は、多少の改善があったにせよ、半世紀近くたった今でも根底にある問題は変わらないように思われる。疎外された現代人の自己分裂と崩壊現象に警鐘を鳴らしたこの作品は 21 世紀の現代にも共通の問題意識を持つことを提唱しているのではないだろうか。

参考文献

- Atwood, Margaret. (2002) *Negotiating with the Dead: A Writer on Writing*, New York: Cambridge UP.
- 一. (1882) *Second Words: Selected Critical Prose*, Anansi.
- 一. (1972) *Survival The Thematic Guide To Canadian Literature*, Anansi.
- 一. (1996) *The Edible Woman*, Virago Press.
- Bloom, Harold. (2009) *Bloom's Modern Critical Views: Margaret Atwood—New Edition*, Infobase Publishing.
- Bouson, J.Brooks. "The Misogyny of Patriarchal culture in *The Handmaid's Tale*", *Modern Critical Interpretations Margaret Atwood's The Handmaid's Tale*, ed. Harold Bloom. Chelsea House. 2001. pp.41-62.
- 一. "A Feminist and Psychoanalytic Approach

in a Women's College", *Approaches to Teaching Atwood's The Handmaid's Tale and Other Works*, Ed by Sharon R. Wilson, Thomas B. Friedman, Shannon Hengen. The Modern Language Association of America, 2000, pp.122-127.

- Cooke, Nathalie. (2004) *Margaret Atwood A Critical Companion*, Greenwood Press.
- Keith, W.J. (1989) *Introducing Margaret Atwood's The Edible Woman*, ECW Press.
- Lilburn, Jeffrey M. (2000) *MAX notes for The Edible Woman*, Research & Education Association.
- Macpherson, Heidi Slettedahl. (2010) *The Cambridge Introduction to Margaret Atwood*, Cambridge University Press.
- Nischik, Reingard M. (2000) *Margaret Atwood Works & Impact*, Camden House.
- Somacarrera, Pilar. (2006) "Power politics: power and identity". Howells, Coral Ann. *The Cambridge companion to Margaret Atwood*. Cambridge University Press.
- Tolan, Fiona. (2007) *Margaret Atwood Feminism and Fiction*, Amsterdam Rodopi.
- Wilson, Sharon Rose. (1993) *Margaret Atwood's Fairy-Tale Sexual Politics*, University Press of Mississippi.
- 大塚由美子 2011 『マーガレット・アトウッド論—サイバールの重層性「個人・国家・地球環境」—』 彩流社
- 伊藤節 2002 「食の政治学とジェンダー・システム—マーガレット・アトウッド『食べられる女』」 東京家政大学研究紀要 第42集(1), pp.1-9
- 伊藤節、岡村直美、窪田憲子、鷺見八重子、宮澤邦子著 2008 『現代作家ガイド5 マーガレット・アトウッド』 彩流社

- 伊藤節、窪田憲子 2003 「マーガレット・アトウッドの作品における犠牲者、無意識、記憶、物語ることなど」 日本カナダ文学会（編） 文学『カナダ文学研究』11、pp.63-66
- 伊藤節、窪田憲子、鷺見八重子 2004 「20世紀英語文学を取巻く風土の変容とその力学—マーガレット・アトウッドを中心に」 東京家政大学研究紀要 第44集（1）、pp.1~13
- 塚田英博 2001 「マーガレット・アトウッドの60年代後半」 成城英文学 25巻 pp.1~17
- 樋渡雅弘 1987 「マーガレット・アトウッドとカナダ的想像力」 英語青年:*the rising generation*.133巻
- マーガレット・アトウッド、アン・ビーティ、アリス・マンロー（他）著 岸本佐知子、古屋美登里、大場正明、森田義信、青柳総江、松岡和子、川本三郎（他）訳 1989 『American Wives 描かれた女性たち』 扶桑社
- マーガレット・アトウッド著 加藤祐佳子訳 1995 『サバイバル—現代カナダ文学入門—』 御茶ノ水書房
- マーガレット・アトウッド著 大浦暁生約 1996 『食べられる女』 新潮社
- マーガレット・アトウッド著 佐藤アヤ子訳 2012 『自責の報い 豊かさの影』 岩波書店